樫の会・句集

平成二十五年度

石井　譲

春

書を離れ芽吹きの庭に降り立ちぬ
春寒の寝床の名句失せにけり
白蓮の一夜に錆びし花あはれ
老桜咲くこの木に籠る命かな
片付かぬ一間残して春炬燵
花惜しむ逆縁の葬続きけり
つくづくと手に齢あり木瓜の花
咲くものに散り敷くものに春惜しむ
草の花に音なき雨や春深し
山や川路行く風も春近し

夏

冷し酒ありて知足の余生かな
夏帯をきりりと締めて茶事の刀自
雷鳴や濁世一喝する如く
酌み交す五月雨上る気配なし
老い二人ヨガのポーズの夏座敷
紫陽花の老醜晒す花憐れ
幾山河越え来し思ひ夕端居
空に舞ひ大河を泳ぐ鯉のぼり
蜘蛛の囲やゆるき風あり光あり
梅雨明けの富士豊かなる裳裾曳き

秋

睡蓮や水面彩る花の精
夕散歩頬撫づ風に秋を知る
蝉時雨短き生の挽歌かな
鈴虫や信濃を包む闇深し
禅堂に無想の静寂夜半の月
竹の春雨読の多き昨日今日
残照の釣瓶落しの余生かな
はらからの五人揃ひて墓洗ふ
月白や静寂に眠る大浅間
朽ちまじと書を積み老の夜長かな

冬

それぞれの余生もち寄り新年会
越後路や山添層々と雪深し
年ごとに今年限りの賀状増え
ながらえて八十路の柚子湯かな
実の一つだになき柿の落葉掃き
読し本また買ふあわれ枯芒
熱燗や憂国の士の声高し
相次ぎし友の訃報や除夜の鐘
入り日浴びすすきの原は銀の湖
散紅葉雲場の池を染めにけり

加藤　將

春

来し方は悔ゆことばかり春炬燵
春疾風欠航の文字点滅す
我が命神にあづけて花見酒
早蕨のうぶ毛に憩ふ薄日かな
耀り終へし昼の港や暮の春
天井の雲龍の目や草若葉
春光を集めて眩し朱雀門
星一つ連れて出にけり春の月
朝市の味噌売る婆や春火鉢
名も知らぬ古墳の苔や花の雨

夏

鐘の音の鈍き余韻や半夏雨
魚影濃き尾瀬の流れや未草
水清き琵琶湖を囲む山若葉

山麓の若葉に透けて伊豆の山
裏木戸の土に張りつく夏の猫
舟で行く潮来花嫁菖蒲草
合歓の葉の閉じたる後の蛍かな
釈迦牟尼の慈悲の眼や竹落葉
白浜につづきし松やゆ雪解富士
ほの暗き先手観音露に入る

秋

奥入瀬の蔦に消えゆく風一陣
銀漢の煌めく宙（そら）や飛騨の里
箱根路の夜もまた良し窓の月
暮れなずむ西方浄土古団扇
蔦引きて大樹の露を浴びにけり
神染めし山の紅葉や一里塚
黄落や寄木細工の里に入る
山毛欅の葉の散りて一山冬に入る
口をあけ食べ頃ですと石榴の実
新蕎麦の旗ひらめきし馬籠宿

冬

霜晴や墨の香満ちし書道展
雲はれぬ浅間の嶺や冬に入る
痩身の百済観音初時雨
鈍色の雲をのせたる鰤の海
天と地の隙間を埋める時雨かな
山裾に積もりし溶岩（らば）や枯尾花
津波禍の鉄路の跡や枯あざみ
鳴り響く鎌倉五山除夜の鐘
灯台の灯や遥かなる冬銀河
富士山を風除けとして冬の湖

小泉　寿美雄

春

四分六の家事の分担春浅し
庭先に地鳴きかぼそき余寒かな
寒明や音たてすする摘入汁
朝空に雲ひとすじや梅開く
眉白きガイド滔々（そうそう）雛の家
啓蟄や笠あたらしき石仏
春うらら誤差壱円の出納簿
早天や函嶺にたつ春の虹
葉桜やジャングルジムに赤シャッポ
子のまねる寿限無寿限無やれんげ草

夏

遠山の稜線蒼し夏の月
青梅雨や値下げ札立つ分譲地
僧院の朝の空気や額の花
足もとのせわしき蟻や茜富士
明近し蝉鳴く杜の蒼きかげ
郭公や朱色艶ます不動尊
軌道車のこだませる谷方の花
梅雨晴や術後の妻に戻る笑み
五月雨祈祷所に靴そろひけり
遠山の背に雲立てり百合の花

秋

升酒に塩もる亭主月明り
花カンナ濃き軒陰の裏通り
けつまずくふち欠けバケツ敗戦日
かなかなや法話に禅女まどろめり
朝練の赤きジャージ一空澄める
遠山の蒼く鎮めり後の月
悠久を伝ふニ胡の音残る月
晩学にまなぶ郷土史雁の声
お遊戯の空向く手と手鰯雲
お百度の媼の背や柿紅葉

冬

函嶺に濃ゆき夕日や帰り花
山道の石垣長しお茶の花
トンネルの狭間にはゆる紅葉かな
遠山にともしびひとつ新走
山寺の早き入日やかじけ猫
亡き母の声ふつふつと冬至粥

鐘楼にたすきの僧の息白し
屈伸の膝鳴りにけり初雀
庭走る子の三輪車実南天
通院の妻薄化粧冬ぬくし

中村　敬

春

雪解水音さらさらとワイン蔵
恋猫の一気に登る鬼瓦
かまくらに入りて熱々餅善哉
棒切れで遊ぶ子供ら春の水
魂を空っぽにして滝桜
春愁や廊下に響く古時計
日溜りの子らの遊びや良寛忌
結びたる絵馬の墨の香春めけり
春光や影を流して熱気球
こちらから切れぬ電話や四月馬鹿

夏

船の灯を揺らして響く遠花火
蓼科を絵手紙にして夏見舞
不器用に生きるこの世や山椒魚
素麺の音響かせて子等の夏
炎昼や抜け落ちさうな犬の舌
平仮名を書くように舞ふ蛍かな
葦簀張るかって商家の格子窓
夕焼に駱駝足折祈りけり
ネクタイの四五人くぐる夏のれん
ぴくぴくと蜥蜴の肺や岩の上

秋

傷二つ少年の夏また終る
ひもじさの昭和時代や赤のまま
新秋や腕に名札の新生児
パン焼器ほどよく焦げて涼新た
花蕎麦の小道郵便バイク行く
広々と釧路湿原鰯雲
新蕎麦や柾目の揃ふ吉野箸
深秋や握りの艶の古鞄
絵馬札を高く結びて柿日和
中仙道霧に尾灯の遠のけり

冬

肩出して並ぶ大根夕日落つ
風神の落葉吸い込む裏小路
山小屋の煙ひとすじ冬景色
群青の絵具の底の真冬かな
熱燗や次第に老いの本音論
一徹はほどほどにしてやんちゃんこ
白息や信号待ちの盲導犬
激変の昭和は遠し冬薔薇
看取る手を握り返して寒の入
獅子舞の口より出たる握手の手

吉澤　フミ子

春

一輪のすみれに出合ふまわり道
さめやらぬ街に春光あふれけり
白れんの空に溢れし寺の門
城映す堀にひと筋花筏
車椅子連ねホームの花見かな
丸窓の映える新屋春日和
千年の四股踏む幹や滝桜
参道はしゃがの花咲く古刹かな
咲き登りの武士のよふな野ふじかな
スイトピーの花揺れている美容院

夏

眠る子に風やわらかき団扇かな
父の忌や墓前に手向く夏薊
筆で書く書展の知らせ夏椿
ひと群の蛍袋に風遊ぶ
姉のもの着て出かけんと更衣
野廻りの人影揺るる青田かな

足出して老いの集ひや夏座敷
もてなしは野菜づくしに豆ご飯
髪赤き議員の問や青嵐
中年の恋ほろにがきソーダ水

秋

人混みに姉に似し人地蔵盆
大杉の繁る古刹や秋海棠
玉章（たまずさ）の朱の輝きを絵手紙に
大らかな秋の一字や書道展
神木に千古の命諏訪の秋
萩咲くや碧眼の僧入門す
舞ひ降りし梢の上の竜田姫
火の恋しひとり居の夜の長きかな
吾もまた花のひとつや酔芙蓉
喜寿といふ老の入り口秋桜

冬

赤子の手浄め紅葉の古刹かな
見上ぐれば万華鏡のやふ照紅葉
長靴を履いて晴れ着の七五三
木の間よりひときは深き冬紅葉
ゆるゆると拳開くや冬蕨
柚子の湯に一日の思ひ解きにけり
冬至日やスカイツリーの影長し
手のしみのまたひとつ増え喜寿の春
掌に載せし郁子の実固く口閉ざし
書き終へて五年の重み古日記